

# 戦後岩手の農村保健運動における乳幼児死亡問題と嬰兒籠<sup>エジコ</sup>

——『岩手の保健』誌の分析から——

吉 長 真 子

## はじめに

北海道をのぞき、全国第一位の面積（一千方里—四国地方の面積に相当する—）で、県を二つの山脈、奥羽山脈、北上山脈が縦走し、その間を北に馬淵川、南に北上川が流れ、耕地面積は総面積のわずかに八％（全国平均一六％）、そして人々はあの谷、この谷に<sup>むろ</sup>屯ろして、細い煙を立てています。県民一人当りの所得は、貧しいと言われる東北六県の最下位、人口密度は一平方キロメートル当り九十四人（全国平均二四一人）で、これも北海道をのぞき最下位です。<sup>1)</sup>

そして県下1,173校中392校（35.6％）が僻地校、分校222校中107校が児童数40人に満たない。あの山この谷に、数少ない人々が散在して生きている部落の多いことを物語っている。こういうところから、長期欠席率全国第一位という数字も、全国最下位グループに属する学童成績も生まれてきた。また最も心を痛めさせられるのは、岩手の多産（全国第二位）多死（全国第一位）の事実である。乳児死亡率全国平均（昭和29年）が出生千人に対し44.7人であるのに、岩手県は72.4人。特に県北は高く、232.1人という村すらある。こんな村は、小学校に入るまでに、生まれた子どもが半減している<sup>2)</sup>。

1958年に岩波新書として出版された『ものいわぬ農民』の中で、当時「日本のチベット」と呼ばれた岩手県のことを、大牟羅良<sup>おおむらりょう</sup>はこのように紹介した。

岩手県では農村恐慌や大凶作が続いた1930年代に、「貧窮の度が増せば増すほど医療がいっそう必要度を増すにもかかわらず、逆に医療の方が遠のいてゆく」<sup>3)</sup> 現実、既存の医療（営利の上に立って経営する医療）によっては打開できないこの矛盾を解決するために、実費診療所建設運動から始まって、それが産業組合に受け継がれて医療組合運動、さらに産業組合による国民健康保険代行運動へと発展した<sup>4)</sup>。

国民健康保険法は1938年に公布、施行されたが、岩手の国保は「疾病のために破滅する住民の生活を守る意図から生まれたもの」<sup>5)</sup>であり、「医療と保険（国保）があい寄りあい助けることによって、より住民の健康が守られる」<sup>6)</sup>という信念から国保の普及運動が行われ、病気を未然に防ぐ保健活動にも力が注がれた。そして1943年にはほとんどの市町村に国保の普及をみたが、産業組合が農業会へ統合されたことや、敗戦後の社会混乱によって、国保は深刻な打撃を受けたのだった。県内の医療機関は国保の取扱いを放棄することを申し合わせ、1948年には市町村自治体が国保事業を行うことに法律改正されたものの、国保組合の休廃止が続出、226組合のうち存続は129組合にまで減退してしまった。しかし国保直営の病院・診療所の建設運動によって国保事業と医療事業の一体化を図り、住民の信頼を得、患者から一切金を取らない「十割給付」の市町村も増え、1955年には全国に先駆けて国保の全県普及が達成された。（なお、1959年の国民健康保険法改正実施によって、岩手独自の「十割給付」は不可能となり、直営医療施設も後退して行った。）

本稿ではこのような医療運動の歴史をもつ岩手県の国民健康保険団体連合会（1941年の設立から1948年までは岩手県国民健康保険組合連合会。以下、国保連と略称）の機関誌、『岩手の保健』を取り上げる。

大牟羅良は国保連が国保の再建、普及に苦闘していた1951年から『岩手の保健』の編集を担当し、「保健問題——その根っこは生活そのものにある、そして生活の本音はいろいろ話にこそあらわれている」<sup>7)</sup>という考えから、「ものいわぬ農民」の暮らしの声を活字にしてきた（前出の『ものいわぬ農民』は、それをもとにまとめられた）。本稿では、『岩手の保健』で取り上げられた幅広いテーマの中から、岩手の保健・医療問題の焦点の一つであった乳幼児死亡問題を取り上げる。もちろん、岩手県における

乳幼児死亡問題、母子保健の歴史をめぐっては、先行研究の蓄積を踏まえ<sup>8)</sup>、関連する膨大な資料をつき合わせて検討する必要がある。そこで本稿では課題をごく限定し、乳幼児死亡（乳幼児の生命をいかに守るか）に関わって『岩手の保健』誌上で農家の子育ての象徴的存在として議論されていた嬰兒籠を中心に、分析することにした。

嬰兒籠（エジコ）とは赤ん坊を入れておく用具であり、藁製のものが多いが木製、竹製のものもある。岩手県など東北地方の多くではエジコと呼ばれていたが、地方によってイツミ、ツグラ、クルミ、フゴなど種々の呼び名があった。民俗学では「エジコに赤ん坊をはじめて入れることは、人間界に取り上げられたことを承認する一つの儀式となっていた」<sup>9)</sup>などと言い、エジコの形態や名称、エジコに関する言い伝えや慣行などの調査が行われてきた。

一方エジコの使用状況や衰退していく過程について、調査データを分析し、全国的な見取り図を提示したのは、須江（原）ひろ子らの文化人類学的研究であった<sup>10)</sup>。全国的には戦後エジコが使用されなくなっている傾向の中で、1950年代後半の調査当時、以前と変わらずエジコを使用していた地域は、青森、岩手、秋田など本州の最北端に集中していた。エジコが消失した理由については、

（１）戦後農耕作業が機械化されて人手が不足しなくなったこと。（２）エジコが小児の保健上甚だ悪い影響を与え、殊にクル病の原因となることが小児科医の間で議論されるようになり、保健所によるエジコ撲滅運動が甚だ活発となったこと。（３）終戦後育児という事実について人々が強い関心を持つようになり、小児を従来のように放棄しておいてはいけない、もつといたわるべきだと考えるようになったこと。（育児に対する価値観の変化）。（４）産制（産児制限——吉長註記）の普及による小児数の減少等々<sup>11)</sup>とまとめられている。したがって逆にエジコ保持の因子として作用するものとしては、人手の不足、伝統の強さなどが指摘されるのであり、つまり「東北農村に於ては経済を基盤として全般にわたる問題であり、簡単に解決出来るものではない」<sup>12)</sup>という結論に至る。さらに須江は特定のフィールドにおけるエジコの使用状況を、家族の職業と母親の労働、経済階層などを含めて分析し、「現在の使用状況は母親の家族内における地位・労働の状態とも関連し、

手をかけずに子供を安全にしておけること及び暖房設備の充分でない農家における保温がエジコの利点とされている」<sup>13)</sup>ことを指摘している。

実は『岩手の保健』誌上に出ている嬰兒籠（エジコ）に関する問題は、須江（原）らの研究でほとんど言い尽くされていると言ってよい。しかしそれでも敢えて本稿で『岩手の保健』を取り上げるのは、「日常の吾々の生活の足元にころがつている問題をとり上げ、名もなき庶民どもが具体的事実を出し合つて語り合う〔、〕そういう具体的事実の認識から出発して、逐次社会的関心を深めて行こう」（『編集後記』34号68頁、1954.2）<sup>14)</sup>という大牟羅の編集方針に共鳴する者が育ち、嬰兒籠をめぐって保健・医療関係者と農山村に暮らす人々が真剣に問題を見つめ、解決していこうとする姿が、他の媒体では見られない形であらわれているからである。

では、まず『岩手の保健』及び大牟羅良についての概観と先行研究の状況を示した上で、嬰兒籠をめぐる記事の分析を行うことにしたい。

## 1. 『岩手の保健』と大牟羅良

岩手県国民健康保険組合連合会の機関誌として、『岩手の保健』は1947年8月に創刊された。同誌は現在も刊行されているが、そのうち16号から84号まで（1951年から19年半にわたって）同誌の編集を担当し、全国的に注目を浴びる雑誌に育て上げたのが、大牟羅良（本名大村次則、1909～1993年）であった。同誌の編集者となるまでの経歴については、『ものいわぬ農民』に詳しく記されている。大牟羅は小学校教師をしていた両親のもとに12人兄弟の6番目（五男）として九戸郡大川目村に生まれ、父母の転勤に伴い北上山脈山麓の僻地から僻地を転々として少年時代を過ごした。高等小学校を卒業後は主に山の分校の代用教員として勤務していたが、1938年に渡満し、満州帝国協和会に就職。そして1944年に応召、沖縄で終戦を迎え、捕虜生活の後1946年11月に帰郷して、満州から無事引き揚げたばかりの妻子と再会した。翌年から4年間にわたり古着の行商人として県北の山村を歩き回ったが、1951年に岩手県医療局に勤務。1955年からは岩手県国保連職員となつて、1970年7月に退職するまで『岩手の保健』の編集に当たった<sup>15)</sup>。兄妹3人と父を結核で亡くし、お産で姉を亡くした山村での貧しい暮らし、代用教員

としての経験、満州での「匪賊」討伐、軍隊経験、そして農民の生活に直に接した行商生活。ここで詳しく論ずることはできないが、その一つ一つの経験が、大牟羅良の編集方針や記事の内容、そして読者・投稿者との交流を生み出したのであった。

さて、『岩手の保健』に関するまとまった先行研究としては、北河賢三の論文と大澤京子の論文を挙げることができる<sup>16)</sup>。北河の研究は同誌の編集・刊行を一つの思想運動ととらえ、「編集の仕方と読者との関係および読者同士のやりとり—コミュニケーション—に照準を合わせて」<sup>17)</sup>検討したものである。北河は大牟羅編集時代のうち1951年から1957年前後を、試行錯誤を経て「編集のスタイルが確立した時期」<sup>18)</sup>と位置づけ、この期間を2期に分けて編集方針、新企画を中心とした特徴、読者・投稿者の状況、雑誌に対する読者の反響と編集部への対応について、分析している。そして同誌は「地域の人々の生命と健康を守る保健運動のなかから生まれた雑誌であったが、それゆえに、生活に根ざした「確かさ」とひろがりをもった思想運動を持続し得た、この時代の象徴的な地域雑誌であった」<sup>19)</sup>と評価している。

大澤京子の研究は、岩手県における「育児の近代化」の過程を、『岩手の保健』に掲載された育児に関する記事の分析によって考察したものである<sup>20)</sup>。大澤は創刊号（1947.8）から120号（1983.12）までを編集方針の変化と育児記事の内容によって6期に区分し、各期の概要をまとめている。しかし、『岩手の保健』において編集者大牟羅の個性は極めて重要だったと思われるのだが、大澤は編集者については一切触れておらず、上記の時期区分にも大牟羅の編集担当の開始や終了時期は考慮されていない。大澤の論文では、各期の育児（母子保健）関連記事の特徴が要領よくまとめられているが、それ故に、記事の背後にある、また誌面の端々に感じられる、大牟羅独自の編集方針、及び大牟羅と読者・投稿者との交流（北河の研究で指摘されているような）が捨象されている。そこで本稿では、その大澤論文で捨象された部分を意識しながら、対象を嬰兒籠による子育てに関する記事に限定して議論を整理し、嬰兒籠の問題から派生する乳幼児の生命や農家における子育ての位置づけについても可能な範囲で触れることにしたい。嬰兒籠に関連する記事には、編集者大牟羅が足で集めたルポルタージュやコラム、医師・医学生・国保関係者の調査報告や座談会、保健婦・

看護婦の手記、農村研究者の調査報告、小中学生の作文・詩、学校教師の手記、青年が生い立ちを綴った手記、大牟羅が企画した出題やアンケートに寄せられた回答など多様なものがあるが、その全てを取り上げるだけの紙幅はない。本稿ではひとまず、嬰兒籠に関する議論が頻繁に見られる1951年から1956年までの特徴的な記事を選んで紹介することにする。なお、創刊から大牟羅の編集初期（1951～1957年）までの編集方針や全般的な記事の動向については、北河の研究を参照していただきたい。

## 2. 1951～1956年の記事から

### （1）医学生の声

岩手県では1930年代に東北更新会の活動の一環として、岩手医学専門学校の根本四郎や盛岡赤十字病院の南出英憲ら小児科医が、山間部の無医村で巡回診療や保健活動を行っていた歴史がある<sup>21)</sup>。国保の事業においても戦前から保健活動が重視されていたが、1951～1956年の『岩手の保健』誌上では、磐井病院の「保健挺身隊」と東北大学医学部学生会（自治会）の社会衛生部の活動が目立っている。

磐井病院の酒井清澄院長は保健活動に訪れた先で、手後れのクル病や股関節脱臼の子どもに非常に多く出会っている。中には次のような事例もあった（「手後れの責任を誰が負うべきか？—不具者を訪ね村から村へ—」24号15頁、1952.7）。

姑さんが孫がうるさいとからと言うて両手首、両足首、両膝の三ヵ所左右一緒に縛つて、いっこに入れて置いたのでこの様になりあんした…  
と言うて、やせ細つたひん曲つた足の子どもを連れて来た若い母親は泣き乍ら話した。

酒井は予防活動にはまず啓蒙が絶対必要であることを力説し、組合病院から県立病院に移管された磐井病院の使命を再確認するのであった（「農村の疾病予防活動」18号32～34頁、1951.9）。

東北大学の社会衛生部は1950年に設立され、調査活動とセツルメント活動（診療）を結合させて行っていた。1952年は乳幼児と妊産婦の問題を中心とすることにし、学生たちは夏休みに県北（二戸郡金田一村）と県南（西磐井郡巖手村ほか）に分かれ、県立磐井病院等の援助を受けて集団検診、実態調査、幻灯や紙芝居による啓蒙活動などを行った。その報告が第26号から4号にわたって掲載されている<sup>22)</sup>。

彼らは「沢山の公式データ（資料）を集め、それに高度の操作を加えて整然とした結果を出すよりも、一人々々の農民より真の声、真の姿を見出しそれを正しく観察する」（29号18頁、1953.5）ことを目的としていた。村に滞在して無料診療を続ける中で、いつの間にか無理なく村人の仲間入りをしていた学生たちを、大牟羅は「今までの多くの農村調査は傍観者として一段と高い立場に自分をおいて村人を見下ろすような調査が多かったが、佐々木さんたちの場合は農村の人々と腹をわつて話せるような状態から生まれたのでよそ行きの体裁を飾った言葉での応答から得たものではなかった」（26号27頁、1952.11）と評価している。

西磐井郡巖美村で学生たちは、乳幼児と母親を集めて検診をやると同時に質問をして、乳幼児の発育状況、お産・育児の状況などを調査した。その中で嬰兒籠（いずこ）の使用が乳幼児の発育、特に骨格形成異常の一原因となっているのではないかと、使用率、使用場所や使用期間について調査がなされたのだが、歩行開始の著しい遅延と「いずこ」使用の関係が推測されながらも、「下に藁を敷いて、比較的合理的に作られたこの「いずこ」はそれ程骨形成に重要な原因をなしているとは思われない。たゞ全く日光の当らない暗い家屋のなかに、おきざりにしたまゝ母親は野良に出てゆくという事実の多くは、注目されなければならない」（28号17頁、1953.4）と結論し、嬰兒籠の使用を一方的に否定はしていない。彼らは農村女性の早婚、多産、お産時の習慣、苛酷な労働、育児方法の実態に接し、それらが社会的・経済的要因に因るものであることに気付いていく。そして、

クル病と言えは「東北農村乳幼児」と答えられるほど、東北農村の乳幼児は発育が悪いということとは知らされていたしクル病には肝油はいゝということも知つてはいるが、然し肝油を与えればそれで済むというようなカンタンな問題ではないようである。それは肝油を問題にするよりも“肝油を必要とするクル病である”<sup>（でマ）</sup>ということを発見してやるのが先ず問題なからである。尚一步を進めて言うならば病気の早期発見もさることながら、その病気を作り出している根源—その根源を如何にして除去するかを考えるなければならない。（28号17頁）

と記し、「農村母性を精神的にも身体的にもがんじ

がらめに縛り上げているきづな」（農村の零細化と、農村社会の封建性、封建的な家族制度のからみ合いに由来）を断ち切ることが、母親の健康を守ると同時に乳幼児の健康を守ることであるという結論に到達する（28号18頁）。

社会衛生部の学生たちは、その後も活動の報告や農村医療に対する率直な意見を『岩手の保健』に寄せ、医師として農村に入っていく人材も生まれた。そして「夏（冬）期特別保健指導」は1955年には国保連に継承され、岩手医科大学衛生検査部の学生も活動に加わるようになり、1957年以降の誌面では、岩手大学に替わって岩手医科大学の学生が重要な位置を占めることとなる。

## （2）大牟羅の問いかけ

大牟羅は、編集者として記事に長文の前書きをつけたり編集後記を書くほかに、自ら多くの記事を執筆した。嬰兒籠に関するものは、まず短いコラムの中に登場する。印象的なものを幾つか紹介しよう。

・〈偏見・卓見〉大牟羅「縛られた幼児 幼児は重罪人か？」（29号66頁、1953.5）

幼児の両膝を折らせ尻を出し、両腕が動けないように体の周囲を布切れでぐるぐる巻き、その上立ち上がれないように肩の上をたすきがけに縛りつける。こうして幼児は早朝から昼まで、或いは夕刻まで束縛をとられない。これは「幼児虐待」である。しかしこの農繁期に幼児の不慮死や大怪我を防ぐための、「親の愛情がさせる術」なのである。農村保健問題の研究家は「農村保健の向上はエジコの追放から」と言うが、「然しエジコを追放することによつて幼児の生命をあの世に追放する危険性を如何にして喰いとめ得よう!？」、という大牟羅の叫びは苦渋に満ちている。そして、

可愛い吾が子を重罪人かの様にしぱりつけたまゝで終日野良に働かねばならぬ母親の心を思うと、エジコに泣き寝入りに眠りこける幼児と同様に吾々には言い様もなく悲しい。エジコを追放することより先に農村のお母さんたちを農業労働から解放することを考えずにおられなくなる。

と、母親への同情を示している。

・〈偏見・卓見〉編集部現地採録「忍耐力養成器 精強なる郷土軍隊は嬰兒籠によつて養成された!? 岩手郡松尾村所見」（31号65～66頁、1953.9）

岩手郡松尾村にある松尾鉦山の工員長屋を訪ねて農家出身のおかみさんと話しした際、赤ん坊をオンブして小さい子の手を引いて午前は野菜、午後は魚をそれぞれ1時間以上も行列して買わなければならないことが苦勞だと聞き、大牟羅が「赤ちやんだけでもエジコに入れていつたら」と言う、「山ではエジコは使われながんすのス」との答え。その理由は、「赤坊をエジコに馴れさせるには泣いてもわめいてもかまわないでおくことで、泣いた都度抱き上げる様ではとても訓練が覚束かない、ところが此処は長屋で壁一重が隣家なので他人に迷惑がかかることだし十分な訓練が不可能だとの事」であった。大牟羅はなるほどと思いながら、隣家への迷惑もさることながら、鉦山では赤ん坊をオンブしていても買い物が可能だからエジコを利用せずにすむが、農家の場合は「赤坊をオンブしての農耕は不可能に近いことだ。従つて泣かれてもわめかれても野良へ出るときは手をふり切つても出なければならない」、「つまりエジコの使用は農家のおかれた止むに止まれない事情によるものではなからうか」と考える。そして、

山を下りた村内の或る部落の一農家を訪ねた。この農家は所謂曲り家で馬と人が同じ建物の中に同居している。馬屋には親子の馬がいて子馬がスツパスツパと乳に吸いついていた。縁側の戸が明いていたので中をのぞくと誕生日を迎えた位の赤坊がエジコに入れられてい、その顔に蠅が十匹ほどくつついて這いずりまわっている。蠅という奴は意地の悪い奴で兎角目のふちに集まる。その上時々目やにをほじくる。すると赤坊は初めて手を上げて蠅を追い払うがそれ以外は殆ど蠅の存在を意識しないかの様に目を見開いたまゝで戸外を眺めているのであった。という光景に出会う。「こうしてこの赤坊は空腹にもおむつのよごれにもうるさくつきまとう蠅にもじつと耐え忍ぶ力が養われたのであらう」との思いから、大牟羅は、

農村のエジコ——それは精強なる兵隊の素地を作り、風雪にめげぬ農民を作り、農耕と家事労働と子供を生み育てる三重の重圧に耐ゆる主婦を作り、初年兵の如き立場に耐え得る嫁を育成しているのではあるまいか!!

エジコ!これこそ忍耐力養成器である。と文章を結んでいるが、これは皮肉ではなく、岩手

の現実に対する大牟羅のやりきれぬ思いが伝わってくる。

・編集部現地採録「幼児の願い 九戸郡伊保内村所見」(35号48頁、1954.3)

数え年3歳の双生児が、2人一緒にエジコに入れられていたのを見て、大牟羅は「小鳥の雛鳥のようだ」としみじみ思った。しかし、

小鳥の雛は己の力で飛べるようになればやがて巣立つのだが、エジコの雛は歩行が出来るようになっても仲々巣立たせてくれない。農耕も始まり留守居もない家ではエジコに入れたまゝ肩のところをタスキガケに縛りつけてエジコから出られぬ様にして出かける。そんな日の幼児の思いは果たしてどんなものであろうか?

紫波郡のある中学校の先生は、「記憶にあるところを見ればおそらく三つか四つまで入れられていたんでしようね、早くおふくろが帰つてきてエジコから揚げて呉れ、ばいゝなアと思つたもんでした」と語っていたという。

泣きくたびれて自分を待ち受けているであろう吾が子の側へ飛んで帰えれない農村の母の嘆き——その母と子の間を斯く妨げているものは何であらうか、その妨げているものゝ一つ一つを取り除く努力にこそ明るい明日への希望がつながれるのではあるまいか??

と、大牟羅は母と子を思いやる。

・編集部・現地収録「泣ぐのわらす子供の仕事だ! 二戸郡一農村の或る農家で目の撃から」(37号56頁、1954.7)

「泣いて後を追う幼児を嬰兒籠にむりむり押しこんで野良に出かけようとしている嫁さんにその夫にあたる若い農夫は“泣ぐのエジコ子供の仕事だ!”と言つた」。その言葉は「冷淡にもきこえる」。

しかしその言葉の中には、そうでも言つて幼児に詫び、自分を慰さめねばやりきれぬ親心がひそんでいるのではなからうか? この村に流布されている“泣き痕エ残らないが、焼け痕エ残る”という俚言の中にかく言わざるを得ない親の衷情がうかがえるのではあるまいか?!

と、大牟羅は考えるのであった。

以上の記事から大牟羅は、嬰兒籠の使用の是非を医学的な観点から問題にするよりも、体の自由がきかない形で一人置いておかれる子どもの気持ち、そしてそうせざるを得ない親、特に母親の気持ちはいかばかりかと、心情に訴えていることが感じられる。



出典：『岩手の保健』30号35頁（31号44頁、45号56頁にも同じ写真の掲載あり）。

そして文章だけでなく、効果的に写真も使っている。

写真を掲載して「これでいいのか」と読者に訴えかける手法は24号（1952.7）から既に見えるが、29号（1953.5）からは「読者にお願い 彼に語らしめよ！」というようなタイトルで、写真に撮影された農夫や老婆の思いや子どもの置かれた状況などを方言のまま綴る投稿を呼びかけ、次号に入選作を掲載することを始めた。その2回目の出題が、「読者にお願い このまなざしに応えよ！」（30号35頁、1953.7）と題された上掲の写真であった。農村調査を行っていた東京大学東洋文化研究所の高木宏夫が、胆沢郡姉体村で撮影したものである。大牟羅は田んぼの畦道に置き去りにされた赤ん坊の姿を、「泣いて泣いて泣き疲れた顔に夕風が吹いて通る。泣き疲れて今は泣く気力を失った赤坊は、かなしみとうらみとあわれみとをこめたまなざしで母親をじつとみすえるのである」と描写し、以下のように呼びかけた。

この写真をみられる方は、この赤坊のまなざしの中に無言の訴えをくみとることが出来ると思う。特に岩手県の農山村の多くの方々は自分の子のまなざしを感じるが如くに切ない思いを抱かれることであろう。そしてこの赤坊に、何故斯くしなければならぬかを独自の様につぶやかずにいられぬ思いであろう。

農村のお母さんたち、そして又お父さんたちよ、この赤坊に何故斯くせざるを得ないかの理由とその心境を方言のまゝで語つてほしい。

応募作は18篇と少なかったが、31号（44～45頁、1953.9）に九戸郡山形村、東磐井郡大原町、岩手郡築川村、稗貫郡太田村の読者の入選作が掲載された。

このコーナーの31号の出題は、「読者にお願い 胸の歎きを語り合おう！」（21頁）であった。大牟羅が高木宏夫と訪ねた岩手郡の農家で、嬰兒籠の前に置いた机に野菜や果物、菓子が並べてあり、嬰兒籠の中には死んだ赤ん坊が入っていたという。農事に追われ、衰弱していた赤ん坊を数日経って漸くはるばる汽車で医者へ連れに行く途中、亡くなったのであった。その父親の写真が掲載されていたのだが、泥酔した父親はこう嘆いたのであった。

なあじえ（あの、ね）百姓はじえ、働がねえば食えねえじえ、食うべえと思えば子供見られねえ、わらす見ないでれば、こつただ（こんな）になる……

何とも胸に迫るつぶやきである。大牟羅は、農村に子どもの死は少なくないが、「然しそれらの悲しみは親御たちの胸に秘められたまゝ外部に語られることが少く、それだけに一層深淵の様に悲しみが重くよどんでいるのではないか」と言い、「子を亡くし傷心を抱く親御たちよ！、村から町から不幸な子を一人でも少くするために子を亡くした親の歎きを率直に語り合おうではないか！」と呼びかけた。

この31号には、前出の「忍耐力養成器」の記事もあった他に、この年7月に胆沢郡小山村の開拓団で幼女3人が用水堤で水死した事故についての「大牟羅のルポルタージュもあり、乳幼児の生命をどうやって守るかという問題について、大牟羅の問題意識の高まりが感じられる。大牟羅は「帰らなかつた子ども この一文をみつ子ちゃん（七才）とみ子ちゃん（六才）ムツ子ちゃん（五才）の霊に捧げます」（12～20頁）と題する記事の中で、子どもたちの親が普段の生活の中で人並み以上に子どもたちに対し注意深かったことを明らかにし、「今回の惨事は根本的には農家の貧しさ—子供をかまっていたは生活の立たない様な状態から生まれ出た事件」（19頁）だとした。そしてそれは農村地帯の多くの人々に共通する悩みであり、各村、各部落で悩みを共通する人々が結束して問題解決に動き出す必要があることを訴えた。

岩手では農繁期の子どもの事故死が珍しくないため、この事件についても新聞では小さな扱いしかなされなかったが、大牟羅はこの水死事故について自分の目と耳で検証し、深く考えるところがあったようである。夏期特別保健指導を終えた磐井病院、花泉診療所、村の国保関係者、東北大学医学部学生らが集まって催された座談会の場でも、この事件に触

れている。すなわち「『農村保健問題を語る』座談会記録山路を辿る人々—座談会は徹宵黎明を迎えたが農村医療の黎明は何時の日にか来る?!」（32号12～25頁、1953.11）の記事に、次のような発言がある。

私の見たところではあゝいう生活状態においてこまれ、あゝいう生活をしている限りにおいては到底個々の力であゝいう不幸を防ぎとめることが不可能に近い、むしろあの年まで不幸を出さずに五つ、六つ、七つの年まで育てたことの方が不思議だと思ふ程でした。（22頁）

なのに、「農村には社会保障的な考え方の育つ基盤がない」、「貧しい大多数の人々の痛切な問題は皆の腹の中で切実に考えられているだけで表にあらわれずに消え去つてしまつている」、ここが非常に問題であり、「貧しい人々の切実ななやみを個々の胸の中にしまいこんでおくことでなしに地域社会の問題として結集させてゆく」ことの必要が力説されている（22頁）。先ほどの「帰らなかつた子ども」の記事の中では具体的に、安全な遊び場を作ってやることや、農繁期だけでも部落の家々が交替で子どもたちの見張りを一人つけることを提案していた。

### （3）「童子ホマツだ」

ところで花巻市湯本小学校の熊谷文夫（1956年に27歳）は、満州での生活から入隊、復員後2年間の行商生活を経て小学校教師になった人物で、子どもの作文も含めて度々寄稿しており、その経歴ゆえか大牟羅の考え方と非常に近いものがある。嬰兒籠についても38号の「普段着の農民と農村〈私は行商生活の体験から、方言での雑談からこそありのまゝの日常生活が窺えるものと思う〉」（6～13頁、1954.10）の中で、2歳のとき農繁期に4歳の姉と家に残され、足を踏みはずして囲炉裏に転落した時の火傷の痕が残っている受持ち児童のことを記し、「泣き痕が残らないが焼痕が残る」という俚言を引き合いに出して、

この俚言は、保健関係者に「不衛生だ、乳幼児の発育に有害だ……」と言われ乍らも依然として姿を没しようとしな<sup>（で）</sup>い嬰兒籠の存在理由を明らかに示めしていると思う。つまり嬰兒籠なくしては幼児の不幸な出来事を守り得ないような農耕のいそがしさが必然的に嬰兒籠に頼らざるを得なくしていると思う。（12頁）

と記し、「子供が泣くのう仕事だもな…」という言葉についても大牟羅と同様の見解を示している。44

号「私の十年の遍歴 やろっこ（小僧）から学校教員へ—私の歩ゆんだ道を今の子どもたちに再び迎せまい」（50～55頁、1956.5）では、行商時代農繁期に農家を訪ねると家には誰もいず、「時たま常居の片隅の暗がりに、エジコ（嬰兒籠）がおいてあって、中に幼児の目だけがキラキラと光っていて、見知らぬ男が入って来たためか、急に泣かれて困惑した経験がたびたびあった」ことや、腰の曲がったおばあさんが留守居をしている家では「孫の子守りでも、危険な場所、たとえば、ため池やいりろなどに行かせないように、活動盛りの幼児を、叱りつけながら子守りをするといった状態が多かった」ことが回想されている。熊谷は大牟羅と同じように、エジコには農家における育児に最もふさわしい条件が備わっているので（這い出して土間や囲炉裏に転落する危険を防止する安全地帯）、エジコは農家の実情を考えてみれば子守りのいない家ではぜひとも必要なものであることを説明し、その一方で「エジコに入れられて育っていく農家の子どもたちは母親の愛情にめぐまれぬままに成長していく」ことに同情を寄せている（54頁）。

大牟羅が農村問題解決のために「今まで嘗つて紙上にあらわれたことのない庶民の生の声を如何にかしてそのまゝの形で再現したい」（33号38頁、1953.12）と考えて、33号から新設した「庶民の声・収録」欄は、「あの町この村の農家のいろいろ端などで、それとなく語られている農民の言葉の中から問題点を含むと思われる言葉を、それぞれの村人に方言のまゝの収録をお願いした」（37号28頁、1954.7）ところ多くの投稿者を得た。熊谷も協力者の一人であるが、彼が収録した話の一つに「童子ホマツだ」（43号51～52頁、1956.1）がある。語り手は教え子の父親40歳である。家を訪ねた熊谷と父親が話しているところへ、母親がお膳を出し、囲炉裏端に腰をおろして4ヵ月の赤ちゃんに乳を飲ますと、父親がこう言ったという。

おめえ、なにしてる。ちやらべら（ちやらんぼらん）としてねえで、わらすおぶって漬物だしてこい、童子ホマツだ（編者註—〔中略〕子どもは副産物だ、従つて片手間にみておればよい……の意味になる）おめえ、都会の人だってか？、都会の人だれば、童子みるのがしごとなんだ、百姓というものはそんなことでわがんねんだじゃ（だめなんだ — 吉長註記）

熊谷は「童子ホマツだ」とは「農村特有の宿命的なことば」だととらえ、「この一つの些細なことばが、政治・社会・教育の諸問題に、大きく関連するような気がしてならなかった」と感想を記している。「童子ホマツだ」とは、確かに『岩手の保健』誌上に見られる農村の子育てを象徴している言葉であり、なぜ嬰兒籠が使われるかという理由も説明していると思われる。

同様に、「ホマツ仕事」という言葉も出てくる。大牟羅は「ホマツという言葉」(37号26～27頁、1954.7)の中で、「ホマツという言葉は岩手県全域にわたって通用されている方言で、正に対する副を意味し、ホマツ仕事と言えば副業とか片手間仕事、ホマツ金と言えば小遣い銭といったような意味になる」と説明している。「農村では炊事とか育児などはホマツ仕事つまり片手間仕事としか認めない。農家は言うまでもなく農耕が正業で、それ以外の仕事をどれ程一生けんめいに働いたところで一人前とは、誰も考えてくれない」のである。岩手の農村では嫁を迎えることが「猫ツコ借りる」と表現されることに象徴されているように(編集部現地採録「猫ツコ借りるごどにしあした 胆沢郡水沢町在の一農村で聞いた話」29号33頁、1953.5)、嫁は労働力としか見なされていないのであり、そのために起こる「嫁づとめ」の苛酷さについては誌面に事欠かない<sup>23)</sup>。岩手の農村全域にどの程度一般化できるのかわからないが、子どもを産み育てることが嫁に対して期待されていないだけでなく、誌面から受ける印象ではそもそも乳幼児を育てる営みは農業労働に比してあまりにも軽視されており、まさに「ホマツ仕事」に過ぎないことが理解される(小学校に入る年頃になれば、子どもは農作業の働き手や子守りとなる)。

したがって子守りをする老人や子どもがいなければ、乳幼児は嬰兒籠に入れられて長時間家に残される状況が生み出されるわけだが、子守りをする老人や子どもも楽ではない。『岩手の保健』に度々寄稿している東北農業試験場農村生活研究室の山岸正子によると、東北水田単作地帯の労働年齢は男60歳、女子50歳が限度で、関西、関東の先進地に比較すると10年も短いことが明らかにされているという。山岸は「早老はこうした生活の中からか?〈岩手県の一水田単作地帯(稗貫郡宮野目村)における農業労働と農民の健康状態調査から〉」(37号12～20頁、1954.7)と題する記事の中で、「腰も曲らずしやんとしていれば五〇

才になろうが、また家族人数が多くて炊事が大変であろうが、なかろうが、そんなことは問題にされず働くことが主であ」り(18頁)、

かうして五〇才以上ともなつて腰も曲り、身体も思うようでなくなると自他ともに田んぼがホマツ仕事と認められ、炊事仕事が本職のかたちになつてくる。けれども何といつても腰は曲り、力はなくなり、故障の多い身体であるから炊事だけでも大変な仕事であるのに、孫をあやさなければならず、その上苗とりもしなければならぬ。(19頁)

という状況が報告されている。

そしてそのような外仕事のできない祖母や祖父がいない家では、幼い子どもが下の子の面倒を見ることになる。紙幅の関係で紹介できないのが残念だが、『岩手の保健』には小中学校の教師が送ってきた子どもたちの作文や詩が数多く掲載されており、暮らしの中の労働を綴った作品の中に、子守りの大変さをテーマにしたものも散見される。

#### (4) 出題と回答

『岩手の保健』は1954年には、鶴見俊輔によって『思想の科学』、桑原武夫によって『世界』に紹介されたり、大牟羅自身も『思想の科学』や『教育』に原稿を執筆するなど、中央の学者・文化人の注目を集めるようになった<sup>24)</sup>。そして県内でも大牟羅に共鳴する読者が着実に増え、1954年頃には投稿も随分と集まるようになった。しかしその一方で「農村の悲痛な問題をクローズアップするだけでそれに対する対策については何も示めていない」(「読者通信」30号67頁、1953.7)など、啓蒙記事や指導性を求める批判も寄せられていた。それに対して大牟羅は、岩手県の農村の実態に対する理解が足らず、現地の実状に即した対策を示せる力の持ち合せがないという理由、及び「農村問題の解決は農民自身が自からの生活を情性のまゝ生きることになしに意識的に生きること〔、〕そしてそこから自分たちの目ざさねばならぬ道を発見してゆく事でなければならぬと思うから」という理由から(「編集部より」30号67頁、1953.7)、安易に対策を示すことに消極的であった。しかしそれに代わるものとして36号(1954.5)では、「現在農村(山村、漁村を含む、以下同じ)で問題視されている色々の問題を拾い上げて、現に農村に生活し、その問題を身近かの問題として考えつづけ



ていられる方々に回答を求め、それを収録編集し、農民の啓蒙記事に代えたいと思います」と宣言して、「読者よ！これをどう思う」という欄を新設した(24頁)。

大牟羅は44号(1956.5)のこの欄で、「エジコ(嬰兒籠)についてどう思う？」(22頁)と出題した。エジコの使用は、赤ちゃんの発育、特に骨の発育を妨げ、クル病もエジコに原因するものが多いと、医者は指摘している。そして編集部を訪ねて来た農村研究家の松丸志摩三によると、関西や関東はもちろん、北海道ですらエジコは殆んど使われていないということだった。では「このように好ましくないとされるエジコがなぜ何時までも岩手県では使われているのでしょうか」、「よそのどこの県よりも、めぐまれない立場にいる岩手のかわいそうな赤ちゃんたちを、少しでも幸福にする道を、一人でも多くの人々と一しょにさがしてみたいのです」と、出題の意図が説明されている。出題は、具体的に以下のようなものであった。

**出題** エジコ(嬰兒籠)についてどう思う？

アナタの部落の場合についてお答え下さい。

- 1、赤ちゃんのある家の何パーセントぐらいエジコを使っていますか
- 2、エジコを使っていない家には使わずにすむような特別の事情がありますか
- 3、生後何ヶ月ぐ〔ら〕いまでエジコに入れておきますか
- 4、農繁期も農閑期も同じように入れておきますか
- 5、エジコを使わずにすますためにはどうすればよいでしょうか。

読者からの回答をまとめた「私はこう思う 読者よ！これをどう思うの回答」は、次の45号に掲載された(52～64頁、1956.9)。大牟羅は「岩手の赤ちゃんたちの生活史 エジコ(嬰兒籠)の中で三ヵ年」という表題をつけ、前文に次のように記した。

台所(あの大きいりのある板敷の室)の片すみの暗がりにおかれた、エジコに押しこめられるように入れられたまゝで、泣き疲れてはねむり、又醒めては泣く、そのかすれた声は、遙か野良で働いているお母さんにどうして聞え得ましょう。こうして赤ちゃんは来る日も来る日も、泣いては眠って、眠っては泣いての生活がつづくのです。中には満三年近い月日をこうした状

態におかれるのです。そしてこれが岩手農村の多くの赤ちゃんたちの“生活史”ではないでしょうか、こうした中でゆりかごならぬエジコから墓場へいそぐ赤ちゃんが如何に多いことか！、乳児死亡率全国第一位という数字は、このことを明かに証拠立てていると思います。晴れた秋空の下でも、あの薄暗い茅ぶきの屋根の下に、その存在すら忘れ去られたように生きつづけている赤ちゃん—その赤ちゃんの身の上を、私たちは何と考えるべきでしょう！。(52頁)

回答者は54名。名前から推測して女性と思われるのは、そのうち10名。職業が明記されている者を集計すると、農業13名、農協職員12名、公務員・役場吏員8名、教師8名(うち養護教諭1名)、保健婦2名、日傭2名、家庭薬販売員1名、青年団員1名であった。年齢も表記されている者は、10代が7名、20代が28名、30代が3名、40代が2名であった。11市13郡のうち、盛岡、宮古、遠野の3市と二戸郡がなかっただけで、地域的にはほぼ県全域から回答が寄せられていた。130枚、及び35枚の調査用紙を配って調査した小学校教師も2人いた。

大牟羅は出題に対する回答を紹介する前に、まず次の2人の意見を重要なものとして取り上げた。岩手郡寺田村の役場吏員の意見は、赤ん坊をおんぶすることは老人や子どもでは重労働であるし、歩けるようになった子どもはエジコに入れて首に帯を十文字にタスキがけすることによって、川に落ちる心配も囲炉裏に転げる心配もなく、「幼児の安全地帯」である。そして「エジコに入れることでオシメのめんどろは一日三枚で足りる。エジコの底に灰、藁くずを入れ、その上に一枚オシメを敷き、尻をまくって座らせるので、おひる休みにエジコから上げれば、その時オシメを取りかえ、夜また取りかえて皆が休んでからヨメがオシメのせんたくをやる。労働時間とオシメの使用枚数が節約できるのである」という。岩手郡雫石町の役場吏員の意見はエジコの改良こそ必要というもので、「私は私なりに、現在の農家の育児知識と生活様式においてはエジコはぜったいに必要なものだとの考えをもつもので、医師や保健婦が、単にエジコを悪いものなりとして、通り一べんの指導をしているのには反感さえ感じている」という。そして箱ゾリをヒントに、座位でも寝台としても使え、吊してゆりかごにもなる型のエジコを板で作って使用した経験から、「育児知識の普及、住宅

改善などもさることながら、まず手近なエジコの改良こそ推奨したい」。これらの意見はこれまでの大牟羅自身の主張でもあると思うのだが、ここでの大牟羅は両者の意見を認めながらも、

しかし私たちが考えねばならぬことはエジコが必要だと言っても、それは育てる親たちの側からの必要なものであって、育てられる側の赤ちゃんにとっては、どんなにつらいことでしょうかと、あくまでエジコを無くすためにどうしたらよいかを考えようとする。(54～55頁)

### 第1問 — 「大多数はエジコで育つ」

第1問に、100%或いは殆どが使っているという回答（農家の場合だけの数字と断って回答しているものも多い）が全体の25%で、70%以上が使用しているとの回答にすると、全体の68%に上る。このような回答をもとに大牟羅は、大雑把に言って農村部の赤ちゃんたちの半数以上がエジコの中で育っており、更に非農家を除いた純農家だけを考えれば60～70%位に使用率が高まるとみてよいだろうとしている。これを県南と県北に分けて70～100%と回答した地域を拾ってみると、県南では38部落中23部落（60%）、県北では15部落中13部落（87%）となり、県北のエジコの使用率が県南に比しはるかに多いと推測している。(55～57頁)

### 第2問 — 「ひまびとのいる家」

第2問の回答に上がったのは、まず①非農家（「つとめ人の家」「月給とりの家」「学校の先生や、商人」「公務員の家」——いわゆる“奥さん”と呼ばれる人のある家）、②村の役職員など兼業農家、③純農家の場合には、人手のある家、開拓者の場合、「くらしを考える家」の3例がある。人手のある家とは、野良仕事に耐えなくなった老人のいる家、学童（姑の生んだ子ではなく、赤ちゃんの兄姉に当たる学童）のいる家である。開拓地である岩手郡雫石町の青年（20才）はエジコの使用率を40%と回答しているが、「私の部落は開拓地なので北海道を始め引揚者、それに県下各地の人々で構成されて」おり、エジコを使っていない家は、以前使っていなかったり、エジコの作り方を知らないからでもあると答えている。「くらしを考える家」とは、「いわゆる流行の波に乗って台所改善などやっている家ではなく、合理的にくらしの改善を考えている家」である。たとえば「青年、婦人層の文化運動が正しい形でなされている」と和賀郡湯田村の回答者は、「エジコの少

くなったのは生活が改善、改良されたことが第一の原因でしょう」と書き、保健活動が活発な西磐井郡平泉町長島の青年（19才）は、「子どもに対する認識も高まり、エジコを使うことの時代おくれ的な感じが強くなり、使う家がへってきている」と回答している。大牟羅は、「人手の少い開拓地や、又貧しければ貧しいなりにまともにくらしの改善にとりくんでいる人たちが、エジコを使わずに済ましている」という事実心をもくしている。(57～58頁)

### 第3問 — 「幼児のつるし上げ」

エジコの使用期間の平均は、6ヵ月から長ければ18ヵ月、平均して12ヵ月というような回答が一番多かった。そして県南より県北の方が2～3ヵ月長く、同じ県北でも僻地ほど使用期間が長かった。平均すれば満1年ということだが、以下のような回答が紹介されている。岩手郡葛巻町の青年（24才）は、「私の部落では普通で三年から三年半ぐらいです」と言い、ひどい場合は学校に入る前の年まで入れられていたり、エジコに入ったままでご飯を食べている子もあり、「畑にゆく時などはエジコから脱け出ても遠くへ行けぬように、腰にひもをつけてそれを柱にゆわいつけておきます」。他にも、九戸郡軽米町で「三年も入れておく所もあります」という他、県南でも「私の村では生後六ヶ月から一年位、例外としては三才位まで」（水沢市折居）、「大きい子供の場合は腰にひもをつけておく」（水沢市姉妹町）という回答があることから、エジコに3年もの間入れられている状況が極端な例とばかり言えないことがわかる。さらに最近葛巻町小屋瀬小学校の校長から聞いた話として、「或る家では子供が大きくなってエジコに肩をタスキがけにしばっておいてもぬけ出て歩くので危険で仕方がない。それでエジコを宙にぶら下げてあった」ことを紹介し、大牟羅は「宙にぶら下げられたままで夕ぐれを待たねばならぬ幼児の身の上を思うと何ともいじらしいというかいたましいと言うか、コトバでは言いあらわせないふびんさを感じずにいられません」と記している。(58～60頁)

### 第4問 — 農閑期のない赤ちゃん

大牟羅が意外に感じたのは、農閑期にも変わりなくエジコが使われていることであった。回答者48名中、25名が同じ、19名が若干少なくなる、2名は見かけなくなる、2名はかえって多くなるというのだ。農閑期にそれほど使用が少なくなる原因として

は、①抱きぐせがつく、②保温のため、③赤ちゃんを見る自由がない、という声があった。「抱きぐせがつく」というのは、農閑期だからということで赤ちゃんをしばしば抱くと、それが癖になっていざ農繁期が来た時エジコに入りたがらなくなるということ。②は「農繁期は多忙のため、農閑期は寒いからと言われて入れられるのです」(胆沢郡胆沢村)、エジコから「出しておくとかぜを引いたりするからエジコがよいといわれています」(久慈市山根町)というもの、③は「私の部落ではお母さんが子供を見ることさえできませんから一年中いれておくのです」(胆沢郡胆沢村)、「農閑期と雖も農家の嫁さんは、育児を許されない環境下にある」(花巻市湯本)という説明であった。しかし農閑期にはエジコから出してやる回数が多くなるし、また出しておく時間も長いことがうかがえた。

「農繁期より多く入れている」との答えは、「農繁期には子守などがついている家もあるのですが、農閑期は炭俵、縄<sup>(ママ)</sup>などするために、コタツのそばのエジコがかえて多くみられます」(九戸郡大野村)、「私の部落は田畑が家から離れていますので赤ちゃんを連れて行きますが、農閑期にはかえて多くエジコに入れておきます」(一関市舞川)ということであった。(60～61頁)

#### 第5問 — 幼な子の命を守る為に

大牟羅は回答に挙げられていたエジコの利点を、①子守りがいらぬ、②オムツをしばしば取りかえる必要がない、③エジコに入れたままで授乳できる、④冬期は暖くてよい(夏はカゴエジコで涼しく出来る)、⑤仕事の場所に自由に運搬でき、作業しながら見守ることができる、⑥エジコの下に丸太ん棒を入れてゆり動かすことができる、⑦布団と違って蹴飛ばしてかぜを引くとか、這い回って囲炉裏に転げるとかの不安がない、⑧エジコの中は下に灰、その上に藁、葦草で編んだ敷物、オムツとなっているので小便などが下に染み込むようになっており、尻のただれを緩和できる、とまとめている。しかし大牟羅は、人手不足で赤ちゃんを子守りする余裕のない家にとっては確かに便利なものであり、したがって農家の暮らし方が変わらない限り容易にはエジコの姿が農村から消え去らぬであろうが、「赤ちゃんにとっては全くふびんなことです」と主張する。そして紫波郡紫波町の役場吏員の、「人間の生命を考へない社会において、生産を基本に考えればエジコ

は良いものかもしれない。[中略] 時期的な農業労働を何によって緩和するか、機械化もその一つにちがいないが、どうすれば勤人のように母が家で子供を見れるか、このことを中心に考えてみる必要がある」という意見や、下閉伊郡大川村の中学校教師(29歳)の「結局時間と経済力に余裕を生みだすことがエジコ追放の根本対策であろう。それには農業生産のあり方が問題である」という意見を紹介しつつも、「働いても働いても尚くらしが楽にならない」農村の現状においても実行可能な対策を回答の中から探して紹介している。①「幼児はエジコで育てるものと考え、それ以外の育て方を知らない。エジコが子供の成育に害のあることをぜんぜんわかっていない人が多い」など、エジコの弊害が意外に知られていないので、理解を深めさせる、②家族が皆で話し合って仕事を調整し、「母親に育児のひまを与える」、③過渡的な方法として、木製のベッドを手製するとか、ハンモックを用いる、③「個々の農家ではなかなか解決がつかないのだから保育所とか託児所をもっと作ること」、④「子供の保育に関心が高まれば自然に産児調節への関心も高まるし、子供を少く産めば、今までより子供に手がまわり健康に育<sup>(ママ)</sup>つのではなからうか」、⑤現在の農家の住宅は保温上の考慮が払われていないので、育児に必要な条件を備えた部屋に改善する、などの意見であった。(61～63頁)

以上のように読者の回答をまとめて大牟羅が考えたことは、「われわれ個々の人々が“生命の尊厳”ということをもどれだけ心底からわかっていたろうか」ということであった。そして、

私たちは真にこの“生命の尊厳”を心底から感じるなら、エジコの問題も真剣に考えられる筈だと思います。そしてその解決のための努力がなされ、その努力の中で生活の不合理や生活の向上を妨げているあらゆる原因—その中には個人の責任も社会の責任、政治の責任もある—も発見できると思います。

と記し、エジコの問題はとりもなおさず「生命の尊厳」に関わる問題であり、どんなに困難でもエジコ追放のために努力することが、生活上のその他の問題とその原因に気付いていくことにもつながることを訴えたのであった。(64頁)

この45号の「読者からの郵便馬車」欄には、44号を友人から見せてもらい、エジコについての出題を

読んで「ジッとしていられなくなり筆をと」ったという、九戸郡軽米町の女性（農業、19歳）の手紙が掲載されていた（45号66～67頁、本田ソノ子「エジコ（嬰兒籠）によせて」、1956.9）。彼女はエジコで弟たちを子守りした懐かしい思い出を綴り、また、

もし私にも母となる日があるならば、わが子をエジコに入れるにちがいないと、エジコに入れたわが子にちぶさをふくませながら「おおメンコ、メンコ、（いゝ子、いゝ子）ひるまで入ってろな」とあやしながら野良に出てゆく自分の姿を頭にうかべるのです。

と未来を空想するのであった。その一方で、

人手が間にあえばエジコに入れずにすむこともできるでしょう。でも常に私たちの村では赤んぼうはエジコに入れるものと固く思っているのです。

と言い、2年も3年もエジコに入れられる子どもたちの姿に、

忙しい農家の子どもほど、母親の愛情にうえているものがあるでしょうか、私たちは早くこういう環境からぬけ出たい。でもどうにもならぬものでしょうか、みんなでしっかり考えてみましょう。わからぬ赤ちゃんたちに苦勞をさせないようにする方法をみつけましょう。

と考えるに至るのであった。『岩手の保健』の記事が彼女に、当たり前と思っていたエジコについて考えさせ、身近な問題から生活を見つめ直すきっかけをつくっているさまが見て取れよう。

## おわりに

ここまで大牟羅良が編集を担当した初期の、1951年から1956年までの『岩手の保健』から、嬰兒籠の使用実態や、嬰兒籠をめぐる大牟羅と読者・投稿者の率直な思いが表現されている記事を紹介してきた。そしてそこから、嬰兒籠一つとってもその背後には家族関係（嫁の地位）や農業形態を中心とする、簡単には解決できない奥深い問題が横たわっていたことが読みとれた。もっとも嬰兒籠には、田畑へ持ち運びやすいことや保温面などの利点があり、使用方法にいろいろ工夫や配慮がなされている場合があったことも記事から確認でき、そして今日の家庭でもベビーラックやベビーサークル、危険防止の柵などが必要とされていることから、嬰兒籠の使用は一

概に否定されるべきものとは思えない。大牟羅が言う「嬰兒籠の問題」は、嬰兒籠自体の問題ではなく、嬰兒籠に子どもを入れてただ一人屋内に、しかも光の当たらない部屋に長時間置いておくこと、そして這うようになったり歩くようになっても体の自由がきかない形で固定されることに問題があったのだと、理解できよう。しかし大牟羅は、あくまで嬰兒籠を使うことを問題にし、嬰兒籠のいらない子育てを求めた。母親が子育ての時間を与えられることを望んでいたとも言える。大牟羅は、子どもの生命を守るために生み出された嬰兒籠が、子どもの「生命の尊厳」を侵している現実、に耐え難いものを感じたのであろう。

今回取り上げられなかった1957年以降の『岩手の保健』には、農家の女性や青年たちがわら半紙に鉛筆書きで送ってきた原稿が増えてくるが、1960年代に入ると出稼ぎや集団就職などによる離村者が増えて、誌面に新たな状況が生まれてくる。その中で注目したいのは、石川敬治郎の存在である。岩手医科大学衛生検査部の学生、石川敬治郎は、雑誌『世界』に紹介された『岩手の保健』を入手したことをきっかけに、「農村の医療の実態並びに問題点の所在等を、自分自身の目で見、体でもつて知つて行く」機会を大牟羅に求め（「読者からの郵便馬車」欄、40号67頁、1955.5）、1956年夏には僻地部落を対象にした国保連の保健活動に学友とともに参加した。石川はその保健活動の感想を45号に寄せているが（「保健活動における医学生の記録 アップ（母ちゃん）とも言えぬ中に 幼児の紅い唇を永遠に閉ざさせてはならない！」6～15頁、1956.9）、保健活動を通して、「若い母親たちが子どもに対する愛情がいかに深かろうとも、子供たちを生む力も、育てる力も充分に与えられていない現実というもの」について深く考えさせられたという（9頁）。その一方で、「あの子は生れずぎ（生れつき＝生来）弱くてね。あれだけしか命うこもらって来ながうたべ」という母親の言葉や、自分の子どもの命日や季節すら覚えていなかったり、自分の死んだ子どもの数を思い出せなかった母親たちのことを取り上げ、「宿命的な逃げ道を決して作らずに、あくまでも自分たちの責任とと思って最後まで考えぬこう。その上に更に、自分たちの責任でそうなったけれど、何故自分たちはそれだけしかやれなかったのかということを考えてゆこう」と呼びかけた（15頁）。そして衛生検査部農村保健班では、

乳児死亡や子育ての問題を農村の人々自身にも考えてもらおうと、「〈岩手の赤ちゃんたちよ 何故あの世へ急ぐ?! —医学生たちはこう嘆く—〉子供達をもっと大事にそして幸に！—岩手の乳児死亡の問題を中心に—」という長文の記事をわかりやすく執筆し、48号（1957.5）から50号（1957.12）まで3回にわたって連載した。さらにその後小児科の医師となった石川は大牟羅の呼びかけに応じ、読者の体験を集めて岩手の生活にふさわしい農村版育児書を作るべく、60号（1961.1）から「どの子もすこやかに！—読者が作った農村向け育児法—」の連載を始めた。嬰兒籠を使わずにすむ育児の方法も、68号（23～30頁、1963.7）で、読者の手紙を紹介しながら考えられている。その記事からは、嬰兒籠の使用が減ってきたことがうかがえるが、その理由の一つに、嬰兒籠を作れるだけの藁細工の腕のある老人たちがいなくなってきたことも挙げられている。「読者よ！これをどう思う」欄に出題した「農村の幼な子はどう守られている？」の回答をまとめた65号の記事（50～60頁、1962.7）でも、嬰兒籠の使用が少なくなり、しかし農家の暮らしが高まってきたが故の危険は増え、小さな部落にも保育所を開設してほしいという声は何よりも大きくなっている。また1957年には国保連の「乳児死亡率半減運動」が始まって、県内の多くの市町村で組織的に乳児死亡対策が進んでいくことから、1957年以降の記事については各地の母子保健事業の展開とあわせて、改めて検討したいと思う。

大牟羅は、前出の「エジコ（嬰兒籠）」についてどう思う？」の回答をまとめた45号の記事を、次のように結んでいた。

エジコが岩手の農村から姿を消すのは何時の日か？、それは私たち一人一人のくらしの中に、又日本の政治の中に“生命の尊厳”という基本的な筋道が正しく貫かれる時だと思えます。

（64頁）

日本中からエジコは姿を消したが、果たして私たち一人一人の暮らしの中に、そして日本の政治の中に、「生命の尊厳」は貫かれているだろうか。日本中で乳幼児への虐待をはじめ、子どもの生命に関わる事件や事故の報道が絶えず、そして国外では今も戦争やテロで多くの人命がいとも簡単に失われている事態に、大牟羅の言葉が重く響く。

## 註

- 1) 大牟羅良『ものいわぬ農民』岩波書店、1958年、38頁。
- 2) 同上。
- 3) 大牟羅良・菊地武雄『荒廃する農村と医療』岩波書店、1971年、106頁（大牟羅執筆部分）。
- 4) 以下、同上書、及び菊地武雄『自分たちで生命を守った村』（岩波書店、1968年）、『岩手国保の歩んだ道』（岩手県国民健康保険団体連合会、1955年）を参照。
- 5) 前掲、『荒廃する農村と医療』119頁。
- 6) 同上書、122頁。
- 7) 前掲、『ものいわぬ農民』i 頁。
- 8) 畠山富而が岩手県の母子保健に関する各種資料を体系的にまとめ、解説を加えている（畠山『地域保健から見た岩手県の母子保健の歩み』第1巻～第5巻、川嶋印刷、1990年～1996年）。
- 9) 大藤ゆき『児やらい』岩崎美術社、1968年、207頁。
- 10) 祖父江孝男・須江ひろ子・村上泰治「エジコに関する文化人類学的研究—分布及地域の変異について」『人類学雑誌』第66巻第2号、1957年。須江ひろ子「エジコに関する文化人類学的研究—宮城県のエジコ使用地域における調査」『人類学雑誌』第66巻第3号、1958年。なお両論文の成果の一部は、我妻洋・原ひろ子『しつけ』（弘文堂、1974年）の中に紹介されているが、調査が行われた当時研究テーマの一つとなっていた「エジコ使用がパーソナリティにどんな影響を及ぼすか」という問題については、「問題提起のしかた自体が実証不能というか、それよりも、まず無意味な発想であ」と反省されている（同書、50～56頁）。
- 11) 前掲、祖父江・須江・村上論文、29頁。
- 12) 同上。
- 13) 前掲、須江論文、35頁。
- 14) 以下、『岩手の保健』からの引用については、記事の号数、頁数、発行年月を本文中に示す。引用文中の仮名遣い、ルビ、傍点、括弧内の編者註などは、原文のままである。縦書き用の繰り返し記号については、記号を使わず書き改めた。
- 15) 前掲、『ものいわぬ農民』11～36頁。また後掲（註17）北河論文も参照。
- 16) その他畠山前掲書（註8）の中でも『岩手の保健』に関する紹介があり、創刊号から127号（1986年）までの母子保健関係の記事の動向について、時代背景や小児科医としての自身の体験も交えながらまとめられてい

- る。また、『岩手の保健』に掲載された多数の記事が、同書に収められている。
- 17) 北河賢三「大牟羅良と『岩手の保健』—雑誌の編集と読者との関係を中心にして—」『年報 日本現代史』第8号、2002年、37頁。
- 18) 同上、38頁。
- 19) 同上、65～66頁。
- 20) 大澤京子「岩手県における「育児」の近代化—「岩手の保健」をてがかりとして—」『岩手大学教育学部研究年報』第44巻第2号、1985年。また大澤は、第60号(1961.1)から6年かけて18回にわたり連載された医師石川敬治郎の「どの子もすこやかに!—読者が作った農村向育児法—」を特に取り上げ、同時期の婦人雑誌育児記事との異同も含めて、詳細に内容を検討している(同「岩手県における「育児」の近代化(2)—「農村向育児法」について—」『岩手大学教育学部研究年報』第45巻第1号、1985年)。
- 21) 畠山富而『野の花—岩手県の母子保健に生きた人々』メディサイエンス社、1982年、55頁～118頁。根本、南出は実態調査も行っており、クル病の調査からエジコ排除に力を注ぐようになった。また当時の社会医学的調査として、高橋実『東北一純農村の医学的分析』(岩手県医薬購買販売利用組合联合会、1940年)もある。
- 22) 「農村の母子衛生についての感想 農村の母親達の姿に接して—岩手県二戸郡金田一村の調査—(第1報)」(26号26～30頁、1952.11)、「農村の乳幼児はこんな環境に生きていた—西磐井郡厳美村の乳幼児調査(第一報)」(27号20～31頁、1953.2)、「農村の婦人はこんな環境に生きていた—西磐井郡厳美村の乳幼児調査(第二報)」(28号12～18頁、1953.4)、「農村の母親たちはこんな環境に生きていた—二戸郡金田一村の母子衛生調査(第二報)」(29号18～25頁、1953.5)。
- 23) 戦前の例であるが、『岩手の保健』の読者・投稿者の一人である伊藤まつをの自伝も参照されたい(伊藤まつを『石ころのはるかな道』講談社、1970年)。
- 24) 前掲、北河論文、50～51頁。
- 【附記】
- 本稿の作成にあたっては、『岩手の保健』バックナンバーの入手をはじめ、北河賢三氏に大変お世話になりました。また北河氏を中心とする研究会で同誌を取り上げた際の参加者の議論から、多くの示唆を得ました。記して感謝申し上げます。
- 写真の転載については、『岩手の保健』編集部より許可をいただきました。お礼申し上げます。